

信毎俳壇

今井 聖選

朝顔の葉の中にある犬の顔	(佐久市) 水間喜美子
渦潮の底のスマートフォンいくつ	(長野市) 原田 浩生
篠笛の少女の顔夏祭	(大桑村) 木戸口信幸
梅雨曇り腰痛む妻のシヨーツ干す	(箕輪町) 柴 和夫
悪夢見し疲れ残りぬ夏の朝	(上田市) 西田 裕子
祭後忽然と消ゆ屋台連	(辰野町) 矢島あさ子
囀る声と午の鳴き声夏の空	(須坂市) 丸山 英子
膨らみし蕾腐らす返り梅雨	(佐久市) 平林まち子
サンガラス外す原爆ドーム前	(中野市) 芋川 菊水
巣を守る鋭き羽音夏燕	(長野市) 神谷 伸一
佳作	
梅雨晴や軽くなりたる戸の滑り	(長野市) 坂口 智弘
麓まで響くホルンや開山祭	(長野市) 宮沢 信博

選評

一句目、朝顔の葉の輪郭の中に犬の目鼻を想像してみる。想像や錯覚は詩の要素である。二句目、渦潮を見つめていると、これを撮るつもりでうっかり海中に落としてしまったスマートフォンの数を

思ってしまう。海底に眠る無数の携帯電話。これも想像力の句。三句目、篠笛を吹く少女の顔(あご)が浮かぶ。焦点の設定が良い。四句目、夫婦愛の句。「シヨーツ」が具体的で切実。

神野 紗希選

ませそばの箸の重さよ油照	(須坂市) 富田 孝弘
席巻るTシャツ譲られるTシャツ	(飯田市) 吉沢 奨
ベビーカー十間に燕の子は梁に	(長野市) 荻原 宏祐
いちりんしやせすじびんだすももあま	(中野市) 風間 一乃
ハーボンをエヒアンで割る避暑地かな	(長野市) 宮沢 信博
海底に眠る女神や海月群	(大桑村) 木戸口信幸
熊鈴も四葩も澄めり観音院	(諏訪市) 沢 胡 桃
妣のこと病妻ましろめり藤環椅子	(松本市) 小林 幸平
更級の田んぼの稲に白い花	(千曲市) 小林はなえ
番傘に屋号の文字や立葵	(飯山市) 田中 琢雄
佳作	
抱卵の鴨の巣を避け草を刈る	(長野市) 金井 秀保
葉にはつりぼつりぼつりと雷雨来る	(箕輪町) 松沢 陸

選評

一句目、ませそばの太麺の重量が、のしかかる夏の熱気の圧迫感とともに、体にずしりと響く。混ぜて吸って、暑さに耐える。二句目、電車やバスで的一幕、Tシャツの繰り返しが楽しい。譲る側も譲

られる側も、軽やかに夏を生きる。三句目、ベビーカーと燕の巣が共存しうる、古民家の土間というゆたかな空間。四句目、背筋を伸ばし一輪車を漕ぎ、李の甘さも喜んで…この夏を存分に楽しんで!

坊城 俊樹選

黒薔薇に孤独の匂ふ夕間暮れ	(埼玉県美里町) 飯野佳代子
夜濯す潮の匂ひの家族分	(須坂市) 東郷賀代子
直線が曲線になる酷暑かな	(愛知県大山市) 紅紫あやめ
信濃には信濃の色の雨蛙	(上田市) 久保 孝
白鷺のしのび歩きや田水沸く	(佐久市) 飯島八代恵
亡き母の風鈴の音に眠りけり	(塩尻市) 伊東 聖人
大夕焼見ながら帰る鳥の群れ	(佐久市) 松下 公子
翠樹を割く白糸の滝しぶき	(松本市) 中村 百仙
夕暮れのほたる袋に灯がともし	(長野市) 田中佳津子
ひいふうみ笛数へし祖母の胸	(上田市) 矢島 七島
佳作	
反射光真夏の午後の句集かな	(飯田市) 吉沢 奨
庭先で花火したいと都会の子	(長野市) 清水美佐子

選評

一句目、「黒薔薇」という季題が象徴的。寂しさと哀しさの匂いがするのかもしれない。そんな夕暮れ時に詩人となった作者。二句目、夜になったの洗濯。昼間には家族総出の海水浴だった。そんな

楽しかった海の余韻が潮の香りと共に思い出される。三句目、壮絶な酷暑の真昼時。道路の白線を見たら直線であるはずのものが歪んで曲線に見えた。いやビルの壁もまた歪んで曲線になったかも。